

2020年度 鹿児島大学 奄美群島島めぐり講演会

ふるさとの奄美群島が、世界自然遺産などで注目されるようになってきました。鹿児島大学でも、奄美群島の生物の多様性などを研究し教育に生かすプロジェクトを進めています。その中でわかってきたことを中心に、群島の皆様に紹介する講演会を昨年度に続き開くことになりました。生まれ育った故郷について、この機会に少し勉強し直してはいかがでしょうか？なお、コロナ対策のため会場への入場者数の制限を設け、各自オンライン（Zoom）での参加も可能としました。また、コロナの発生状況によりましては、Zoom 配信のみの開催になることもあります。

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

共催：奄美群島広域事務組合

後援：知名町、天城町、与論町、宇検村、喜界町、笠利町、奄美自然体験活動推進協議会

五島六か所にて、午後 1 時半開始（与論島は 2 時開始）、午後 4 時終了予定

※要事前登録（各回開催日 1 週間前まで）

第 7 回 沖永良部島（知名町フローラル館）

2020年 11月 7日（土）

「暮らしと ICT～いまここにある未来～」 升屋正人（学術情報基盤センター）

狩猟社会、農耕社会、工業社会、そして、情報社会へと続き、今、その次の社会を迎えようとしています。人工知能など先端技術を活用し、あらゆる人が快適に暮らせる超スマート社会、Society 5.0 です。まだまだ遠い未来のように感じるかもしれませんが、既存の情報通信技術（= ICT）で実現できていることがたくさんあります。現在から未来まで、あらゆる場面で暮らしを支える ICT についてわかりやすく解説します。

「奄美諸島の自然史入門」 井村隆介（共通教育センター）

奄美諸島の豊かな自然は、一朝一夕に作られたものではなく、地球の長い営みの中で育まれてきたもので、現在も変化しつつあるものです。この講演では、奄美諸島の自然が豊かな理由を、島々の生い立ちと地球規模の環境変遷の歴史から、みなさんと一緒に考えてみたいと思います。

第 8 回 徳之島（天城町役場 4 階 ユイの里ホール）

2020年 11月 14日（土）

「奄美群島における山羊飼育の意義と問題点」 中西良孝（農学部）

奄美群島を含む薩南諸島には、在来家畜の 1 種であるトカラ山羊やその雑種が飼われており、主に肉または伴侶動物として利用されています。一方、飼育放棄された山羊がノヤギとなって農作物や希少植物の食害をもたらす、植生破壊とそれに伴う土壌浸食を引き起こしています。山羊飼育の楽しみと今後の課題を紹介します。

「世界の中の島唄」 梁川英俊（法文学部）

島唄は奄美群島という狭い範囲で歌われるローカルな唄というイメージが強いかもしれませんが、世界には島唄と意外な共通性で結ばれている民謡がけっこうあります。そして海外の民謡との比較は、島唄の思いがけぬ側面を発見させてくれます。今回はフランス・ブルターニュ地方の民謡を通して、島唄の魅力に迫ってみたいと思います。洋の東西が、歌という行為を通じてしっかりと結ばれていることを実感していただければ幸いです。

第 9 回 与論島（与論町役場 多目的ホール）

2020年 11月 28日（土）

「植物の見方・楽しみ方」 鈴木英治（国際島嶼教育研究センター）

道端に生え普段何気なく見ている植物も、よく見ると様々な形をしています。それは長い進化と適応の歴史を物語っています。しかし奄美群島で約 1700 種もある植物は多様で、どの点に注目して見たらよいかも分かりにくく、図鑑で名前を調べることも大変です。今回は植物に親しむために、分類の基本的な用語の説明と与論島や奄美群島で見られる植物の概略をお話します。

「地域振興のための島嶼景観づくり～美しい島の景観を次の世代へ～」 平 瑞樹 (農学部)

身近な水辺空間、緑の沿道、美しい街並みや歴史的な景観など、私たちの生活にゆとりや潤いをもたらす快適な環境を創造することが求められています。島嶼の美しい景観への再認識、草花や樹木の植栽など、自ら景観形成に取り組むことは、郷土への愛着や誇りを醸成することにもつながります。島の魅力を創出する活動は、自分らの住む地域を良くしていくための話し合い活動への自主的な参加、地域交流の活性化、観光振興や国内外との交流に寄与します。

第10回 奄美大島 宇検村 (生涯学習センター元気の出る館 大ホール)

2020年12月5日(土)

「奄美の自然の観光利用とそれに関わる人々の話 —エコツーリズムと世界自然遺産をキーワードに—」

宋 多情 (国際島嶼教育研究センター)

奄美大島では、金作原国有林散策、マングローブカヌー、アマミノクロウサギナイトツアー、ホエールウォッチングなど、ガイドとともに自然を体験する観光がエコツアーとしてよく知られています。本講演では、人(行政・ガイド・地域住民)が奄美の自然をどのように認識し、観光に活用してきたのかについてお話しします。また、自然の観光利用や世界自然遺産推進など、自然に対する考え方や意識の変化について話し合う機会になればと思います。

「南北600キロの海の幸 —約1000種の魚を食べた教授からの報告—」 大富 潤 (水産学部)

どここの名物はなにに。こんな話、ウキウキしますよね。南北600キロもある鹿児島島の海では、さぞかしたくさんの種類の魚がとれるんでしょうね。…その通り。でも、それを知っている人はごくわずか。そして名物の多くは農畜産物。奄美の海には曾根と呼ばれる海底から突き出た瀬が点在し、好漁場が形成されます。奄美群島が誇る地魚を食べることで、地元の海を守りましょう。そんなお話です。

第11回 喜界島 (喜界町役場 多目的室)

2020年12月12日(土)

「奄美群島の魚たち」 本村浩之 (総合研究博物館)

近年、鹿児島大学総合研究博物館の研究チームが中心となり、奄美群島の魚類相解明に向けた大規模な調査・研究が進められています。奄美群島全域には、2,000種を超える魚類が息すると推定され、これは日本産魚類の半数に相当するが分かってきました。本講演では、フィールド調査の様子を踏まえながら、奄美群島の各島嶼の魚類相の特徴や固有種、近年記録された珍しい魚を紹介いたします。

「奄美群島在来カンキツの特性解明による高度利用化の促進」 山本雅史 (農学部)

奄美群島の在来カンキツの多くは、この地域にしか存在しない貴重な遺伝資源です。これらは、先人から伝えられた島々の財産であり、高い文化的価値を持ちます。しかし、近年では経済栽培品種への更新や病害虫の拡大によって減少が続いています。鹿児島大学農学部では、在来カンキツを見直し、それを核とした島おこしを目的として、その特性解明に関する研究を実施しています。本講演では、奄美群島在来カンキツの魅力や特性を紹介し、特に機能性成分を生かした利用の可能性について考えてみます。

第12回 奄美大島 笠利町 (奄美市笠利総合支所 3階 大会議室)

2020年12月19日(土)

「『魚は島の宝』、その活用による漁業振興と地域づくりを考える」 鳥居享司 (水産学部)

奄美大島では特徴ある魚介類が数多く水揚げされています。その味わいはもちろん、見た目も人目を惹きつけるものが多いです。そんな島の宝である魚を活用した漁業振興や地域づくりについて、フロアの皆様と一緒に考えることができたらと思います。

「奄美の環境文化」の継承が人と集落を育てる」 小栗有子 (法文学部)

みなさんは、シマの山や川、海に近年足を運んでいますか。昔に比べてどうですか。子どもたちはどうですか。今回お話しする「奄美の環境文化」とは、自然と暮らしの関わりのことで、身近にある自然を生活に役立てたり、感謝や恐れの対象として集落民の絆を強めたり、シマで生きていく知恵や技の伝承を含みます。みなさんが大切に思う「奄美の環境文化」を次世代にどうつなぎ、いかに創造し続けるかを一緒に考えたいと思います。

お問い合わせ
お申し込み

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室
(〒894-0026 奄美市名瀬港町15-1 細会館6階)
電話: 0997-69-4852 メール: amamist@cp.i.kagoshima-u.ac.jp

Google フォームで
かんたん申込み

